

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders – Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート（2018.3.12-2019.3.11）

Contents

- P.1 厚真町応援会議：北海道胆振東部地震に際して
- P.2 地域コーディネータの配置について
- P.3 社会課題解決中マップ 東北掲載事例
- P.4-6 みちのく事業ブラッシュアップキャンプ2019 ～まつろわぬ民の宴～
- P.7 東北オープンアカデミー（第4期）
- P.7 気仙沼/石巻 右腕&地域おこし協力隊の動き
- P.8-10 みちのく復興事業シンポジウム ～東北から、パラダイムシフト～
- P.11 福島復興産業人材育成塾（第3期）
- P.11 プロジェクト進捗/ご支援ご寄付のお願い

1

厚真町応援会議：北海道胆振東部地震に際して

2018年9月6日に発生した胆振東部地震で、大規模な土砂災害に見舞われたのは北海道厚真町。東北の自治体では岩手県釜石市、宮城県気仙沼市、石巻市、そしてETICが、ローカルベンチャー推進協議会の仲間として2015年より一緒にしてきました。この繋がりから何かできる事はないかと模索する中で、10月22,23日には、気仙沼市、釜石市の職員や、宮城県女川町のNPO法人アスノキボウの代表理事、岡山県の西粟倉村の職員、ETIC代表宮城から十数人が厚真町へ赴き「厚真町応援会議」を実施しました。

東北の震災経験者からは「仮設住宅に入った高齢者は閉じこもりやすい。気をつけて」「住民が集えるサロンを作るなど工夫して」などのアドバイスが、また厚真町職員からは「仮設住宅の住民自治会をどう作ればいいのか」「見守りなどの役割分担は必要か」などと様々な質問が飛び交い、東北の復興の経験から本当に様々なことを学びました。

参加した厚真町職員からは、復興計画の策定、財源の課題、生活援助員の体制、集団移転や都市計画の進め方、発災を機に住民参加型のまちづくりをどのように推進するかなど、様々な課題に直面する中で、未来像から目の前の膨大な手続きまでを含めて、これから起こること・すべきことを具体的に学べたことは本当に有り難い、との言葉がありました。また、大きな被害があったからこそ、震災前からあった問題意識にどれだけ真剣に向き合って取り組めるか、次の時代のお金・人をどう作っていくか、その腹の括りが重要だと思っている、と決意の言葉もありました。

ETICではこれを受け、町の施策推進の力となる人材の増員をサポートすることがその大きな一歩になると考え、厚真町役場職員の採用支援を行いました。

※ ローカルベンチャー推進協議会とは：

全国11市町村が連携し、地方創生の核となる「地方での起業・新規事業（ローカルベンチャー）」を創出するための広域連携プラットフォーム。メンバー自治体は、岡山県西粟倉村（代表幹事）、岩手県釜石市（副代表幹事）、北海道下川町、同厚真町、宮城県気仙沼市、同石巻市、石川県七尾市、島根県雲南市、徳島県上勝町、熊本県南小国町、宮崎県日南市。事務局はNPO法人ETIC。
<https://initiative.localventures.jp/>



- みちのく復興事業パートナーズの活動と連動し、2020年に向けて、東北のリーダーコミュニティをより活性化、自立化して継続していくことを目指し、各地のリーダー交流密度を上げ、新しい次世代層を発掘する存在として、各地の現状に精通し、ネットワークを持つコーディネータを各県に配置。
- 岩手県：太田陽之さん（Pサポ）、宮城県：小林恵里さん（風景屋 ELTAS）、福島県：高橋あゆみさん（復興支援センターMIRAI）と三県のCDが確定し、8月から活動が始まった。

項目	活動の方法	活動のKPI（初年度）
①東北のリーダー、リーダー予備軍の発掘	これまでのネットワークを使いながら共通フォームにリスト化していく	各県人材リスト50名（リーダー層・予備軍層含む）／年
②東北のリーダーへの取材・原稿作成	①の中から、月に2-3件程度直接現地で取材を行い、共通フォームを使いながら「社会課題解決中MAP」にアップしていく	取材・記事掲載数2-3記事／月
③みちのく事業ブラッシュアップキャンプの開催	運営スタッフとして、企画から広報、当日の開催を一緒に動いていく	盛り多きイベントとなること
④東北オープンアカデミーのFW組成コーディネータ	リーダーたちとの会話や取材の中でFWの種をみつけ、人を繋ぎながら、リーダーにFWの開催を提案していく	東北OAのFW組成数各県3件／年
⑤リーダーや予備軍の交流の場の開催	企画から一緒に考えていく	初年度は1～2回開催
⑥定例ミーティング	事務局との月1回のオンラインミーティング、パートナーズの連絡会でも数ヶ月に一度オンラインで活動報告	－

上記全てにおいて、リーダーたちに近い存在として、直接コミュニケーション取り、東北のリーダーコミュニティの仲間を増やしたり、事業ブラッシュアップキャンプや東北OAの参加者を増やすのが役割。

岩手県コーディネータ 太田陽之さん

宮古市出身。岩手大学在学中から地域づくりに関わる。卒業後、2012年にNPO法人いわて地域づくり支援センターに入社。地域コミュニティ組織の運営や事業実施の支援、公共交通の利用実態調査などの社会ニーズ調査に従事。同法人を退職後、2015年度から現在従事している株式会社Pサポ東北の設立から加わり、岩手県を拠点として、公共交通や観光動態の実態調査の実施や、地域コミュニティ組織における住民参加型の事業計画策定や事業実施の支援に従事。日々、パブリックリソースのサポートを行っている。

宮城県コーディネータ 小林恵里さん

2009年早稲田大学国際教養学部卒業。新卒で入社した国際見本市主催会社にて、3年弱セミナー企画運営を担当する。その後小さな古本屋を立ち上げ、約1年仕入れから値付け、在庫管理、店頭販売まで経験。軌道に乗った店を共同経営者に託し、約1年間外資系インターネット関連企業人事部にて新卒採用に従事する。2013年一般社団法人ap bankへ転職後、2014年にはReborn-Art Festival（芸術祭）の立ち上げのため石巻に移住し、実行委員会の立ち上げから行政との連携、アーティストや現地協力者の対応まで幅広く業務を担当。2017年夏に第一回Reborn-Art Festivalの開催を経て退職。2017年11月より夫が主宰する風景屋ELTASへ参画。主に企画、ディレクション、バイヤー業務を担当する。

福島県コーディネータ 高橋あゆみさん

復興支援センターMIRAI所属、まちづくりコーディネーター。
福島県福島市出身。福島大学卒業後、（一社）ワカツクに入社し、長期実践型インターンシップをとって若者がチャレンジしていく環境づくりに取り組む。2014年4月から福島大学のCOC事業「ふくしま未来学」に参画し、原子力災害からの地域再生をめざし、住民と学生がともに地域の課題解決にむけて学び、実践をするプログラムの企画・運営を行う。2014～2015年には福島市の未来を担う若者向け人材育成プロジェクト「ふくしま復興塾」の事務局も務める。2018年8月から現職において、オープンデータブック「相馬INDEX」の制作をはじめとした相馬市の産業創出と地域の課題解決にむけた企画・運営を行っている。

岩手県

人口減少するからこそ豊かになるひとつづくり、まちづくり

NPO法人 SET

更新中 2019.01.28



岩手県の沿岸部に位置する陸奥市田代町。夏日本大震災一ヵ月後から、東京都など首都圏の大学生らがボランティアとして場入りし活動を始めた。復旧作業を田代町の住民と行いながら交わり会場で住民が「やりたい」と考えていることに触れ、実現する方法を一緒に考え取り組んできました。

人口が減少している地域だからこそ個人の「できること」が増えていく、「やりたい」が「できた」に変わる町を目指し、田代町での生活や交流を通して、首都圏を主にした在外の大学生や中内の中高生や住民が自分の「やりたい」に向き合い挑戦する人々でにぎわう町になりはじめています。

馬との関わりで育む、生きる力

一般社団法人 三陸騎舎

更新中 2019.01.27



岩手県宮古市雄勝地区は世界遺産となった雄勝海岸が広えられ、表内陸部だけあり森林に囲まれ、川の清流が心地よい山間部に位置する地区です。この豊かな自然の中で、馬との関わりを通して、心を癒やし、心を育てる「ホースセラピー」に取り組んでいます。

馬の草原などで思い通りにいかない時に、馬と一緒に達成するために自分が何ができるかを考えることが、自分の心を育てることにつながり、自分の考えや思いが実現できるときに心が癒やされ新しい挑戦に取り組みむホースセラピーを通じて得られます。ホースセラピーは、年齢や性別、障がいの有無の隔てなく体験することが可能です。中でも、「児童発達支援・放課後等デイサービス」のプログラムでは参加する子どもひとりひとりのその日の目標の様子に合わせて内容を組み、子どもが自分の考えで馬と接することが出来るよう実践しています。

宮城県

限界集落から豊かな循環型社会を目指す

一般社団法人はまのね

更新中 2018.11.21



震災により残った民家は4戸、住んでいるのは2世帯となりました。石巻市は限集落の出現。かつての民家は二層と高くないけれど、お話しが楽しく存続していくことを目的にスタートしたのは「はまのね」です。「暮らし」「産業」「教育」「観光」の4つの柱に、カフェや、店舗、ギャラリー、自然学校、マリンシフト、ものづくりなど、様々なプロジェクトを展開しています。

想いだけではじめた活動は、「Life はまのね」を記念に年間1万5千人の交流人口を集めるまでになりました。さらには、男性チャレンジする仲間にも生まれ、現況からはじめたまちづくりや、SMP（スタンダードアップパドル）、カヌー、BBQなどのアクティビティを開催させ、性別や職業についても大規模な交流を日増しに動かすまでになっています。

東北の豊かな資源を「価値」に変換する最初のstepとして、フィンランドサウナを東北中に展開していきたい！

MARUMORI SAUNA株式会社

更新中 2019.01.28



本意の意味での地方創生を実現するためには、地域に住民と一人一人が関わりを持ちたい。この地域を自分ですぐに「自分たちの家」として受け入れ、自分の手を動かして展開することが必要だと考えます。

自分たちで行動をおこなうための最初のステップは感情的にわかりやすく、楽しいものが重要です。そこで、私たちは「フィンランドサウナ」を選びました。

フィンランドサウナは、東北の資源である自然を「価値」に変換することが出来ます。サウナを自分たちの力でつくり、自分たちの手で展開しながら事業として展開することで、東北の資源を経済的な価値に変換する術を学びながら、高の価値での地方創生を目指しています。

福島県

地域の隠れた魅力を発掘。フードコートで生産者も消費者も喜ぶ地産地消のかたちを実現

郡山観光交通株式会社/株式会社孫の手(山口タクシーグループ)

更新中 2018.11.25



私たちは1953年に、福島県郡山市を中心とするエリアでタクシーを母体として創業し、バス事業や福祉介護事業、観光旅行事業など、地域に根ざした事業を幅広く行ってきました。主に地域の高齢者をターゲットとした、「生きがい」のためのバスツアーを展開するなか、それらの強みを生かし、「フードコート」を活用した場で味わう地産地消のレストラン「Food Camp」を新規事業として立ち上げ、地域の魅力を発信しています。

駆け込める居場所”まかないこども食堂”で“孤立”を生まないしくみをつくる

非営利任意団体 KAKECOMI

更新中 2019.01.28



かけこみ寺+コミュニティみんなの、わたしの居場所

KAKECOMIは福島県白河市で、「生きつらさ(貧、病、孤独、トラウマ等)」を抱えた人たちが駆け込める居場所をつくっています。こどもが無料でごはんを安心して食べられる居場所「まかないこども食堂」を。そして、安全を必要とする女性と親子が人とつながりを取り戻すサーブティッシュハウス「森のたべまな」です。

私たちは、人と人との関係性を安心してつくることのできる居場所づくりから、孤立によってその人の可能性の芽が萎むことのないよう、ひとりひとりが自分の人生を歩むことのできる社会をめざしています。

開催概要

- ・開催日程：2019年1月10日(木)～11日(金)
- ・開催場所：岩沼屋（宮城県仙台市）
- ・参加人数：54名

● みちのく事業ブラッシュアップキャンプとは

東北で社会課題の解決や地域おこしに取り組む起業家やリーダーが集まり、お互いの事業を発展するために構想している新しい事業や取り組みをプレゼンし合い意見交換を重ねる場として開催しています。

さらに、今回の開催日程の中で、リーダー同士の交流を通して互いの強みを活かした事業の協力や連携が生まれるキッカケづくりの場にもなっていました。ここからは、当日の様子を紹介していきます。

● 開会・オープニング

主に岩手、宮城、福島の3県から約60名が参加して行われた当キャンプ、会場に用意されたアイスも埋まりいよいよ始まります。初めて今回の様な集まりに参加する人、同様の集まりで既に見知っている人がいて、初めての人は「どんなことを話せば良いの?」というそわそわとしたやや緊張感が漂う会場で、今回の集まりの趣旨を説明していきます。



主催者側から、

「今回の集まりではメンタリングする側、される側、年齢や立場は関係なく、お互いを高め合う場として、自ら一段上のステージに立ち上げられる機会にしてほしい」

といった趣旨の挨拶があり、さらに、これまでも参加したことのある人からも、

「自分を丸裸にされて、異なる視点から気づきもらえる場」

「自分の中のいろいろな引き出しを見せ合い高め合う場」

といった、経験を交えてこの集まりがどんな場なのかの紹介があり会場の雰囲気も少しほぐれました。その後、お隣の人同士での自己紹介タイムを挟み、相互メンタリングの時間が始まります。

● 相互メンタリング



今回のメンタリングはメンター1名とメンティー2組にスタッフ1名が加わる形式で12テーブルに分かれて実施しました。

メンティーからの「新事業のアイデアを実現するために必要なこと」「取り組んでいる事業での課題を解決するヒント」といった相談に対する各メンターの視点でのアドバイスだけでなく、テーブルにつき全員がひとりひとりの相談内容について考え、団体間で連携することで解決出来そうな方法を考えるテーブルもありました。

相互メンタリングは当キャンプでは2日間を通じて各メンティー4回(合計2時間)の機会を設けており、毎回の参加者の組み合わせも変わるので、常に参加者間で新しい意見や考え方をお互いの視点で出し合い、持ち込んだ新しい事業やアイデアに改めて向き合い、当初の課題に対する解決方法を確立していくという「ブラッシュアップキャンプ」を体現する時間が流れていました。

● 事業構想VBM (仮想理事会)

事業構想VBMでは、相互メンタリングでメンターを務めた参加者の中から6名が構想中の事業について簡単な発表を行い、他の参加者が発表した団体の仮想理事になり構想中の事業について協議を行いました。



初めて聞いた事業の内容に各参加者の経験や視点を踏まえた質問やアイデアが出されたことで、事業の必要性や課題を掘り下げ、実現する上での課題の解決策を検討することができました。

VBMの開始早々は興味はあるものの何を話せば良いのかわからないという様子だった参加者も、話が進むにつれて自分事として意見や考えを話せていて、発表者だけでなく参加者にとっても考えを深める場となり、時間としては短かったものの密度の濃い話し合いの場になっていました。

● 話題提供セッション

夕食でお酒を交えて親睦を深め、初日の締めとなる話題提供セッションに入ります。



参加者の中から10名程度から話題提供として「今、自分が話したいこと」を発表してもらい、他の参加者は自分が興味を持った提供者のテーブルに集まります。

発表された話題は「団体間での人事交流や交換留学」「東北のリーダー論」など、この場に集まる人達だからこそ深められるものが多く、お酒を飲みながらということもあってか、どのテーブルも和やかに、時にまじめに議論を行いました。

そして、あるテーブルからは次年度の東北オープンアカデミーのフィールドワークが生まれ、「誰かの関心事」が「みんなのやりたいこと」に発展した瞬間となりました。

● 創発MEETUP

キャンプ2日目は午前中に相互メンタリングを各メンティーが2回ずつ行い、初日に引き続き事業の磨き上げを行いました。昼食を挟んで、キャンプ最後の企画となる創発MEETUPを行います。

この企画では、参加者全員が今回のキャンプを通じてさらに考えを深めたいことを書き出し、自分の考えと近い人同士でグループをつくり、ワールドカフェ方式で議論を深めました。



創発MEETUPにより、参加者間で連携した事業を考えるきっかけや実際の取り組みに発展しそうな結論を得たテーブルもありました。

● クロージング

全ての日程を終えて充実した様子の参加者が、キャンプを通じて収穫したことから「今この瞬間から取り組んでいくこと」をひとりひとり書き出し宣言しました。

ちょうど1日前までは初めて参加する場に戸惑っていた人も、2日間を共に過ごし、自分のことをさらけ出し、考えを深めたことで、「また会おう」と言ってそれぞれの場所に帰る姿が見られました。

● おわりに

今回のキャンプの参加者の感想として、「自分の考えを肯定的に考えることができた」「仲間がいることを確認できた」「事業に活かせる気づきをもたらした」といったコメントが多く見られ、東北の新しい動きの芽が出たキャンプとなりました。

この芽を伸ばして育てるために、今後も東北のリーダー間で交流し学び合う場を事務局がつくることに加え、今回の参加者の間で新たに生まれて続いていくことと思います。



2015年に始動した東北オープンアカデミー。これまでの4期で61件のフィールドワークに、延べ349名の方に参加いただきました。当初、東北に関わる新たな仲間を募る場としてスタートしましたが、昨年からのあり方を大きく見直しました。今の東北には、多様な分野で先鋭的な取り組みが広がってきています。どの地域よりもリーダーシップ密度の濃い東北各地での実践の場を、まずは東北内のリーダーの間で訪問し合う機会(フィールドワーク)として再定義しています。そうしたリーダーシップ密度の高さを求心力として、それぞれに訪問し合う機会を多くの潜在的なフォロアー(都市部の人材等)にも公開するような形で、次なる担い手を呼び込んでいければと考えています。

■2018年度 第4期 8件

- 1) ウニの町が創る、「海的环境を守りつなぐ」地域商社のしくみと八戸の巨大朝市@岩手県洋野町、青森県八戸市
- 2) 馬ふんと地熱とマッシュルーム@岩手県八幡平市
- 3) 2019ラグビーワールドカップ・レガシープロジェクトと釜石DMO戦略@岩手県釜石市
- 4) 海中熟成酒のトライアルツアー@岩手県陸前高田市
- 5) 食と農で実現する世界基準の地方創生@宮城県山元町
- 6) 企業研修に役立つ、その浄財で福島の人材を育成する@福島県南相馬市
- 7) 人口ゼロからの挑戦。「加点法」でのまちづくり。@福島県浪江町
- 8) 西海岸プロジェクト@山形県庄内地方

※2019年度(第5期)は間もなく公開予定です。



<気仙沼市> 2018年度に気仙沼市本吉放牧場(モーランド)に地域おこし協力隊が参画いたしました。モーランドは気仙沼市南西部の山間に広がる牧場で、古くから地域に親しまれてきました。また、主の事業は地域の酪農家から預かった牛を放牧することでありましたが、周囲の酪農家も高齢化が進んでおり、これまでの事業の在り方から、新しい挑戦をしていく必要があります。そこで協力隊が新たに加わり、新しいモーランドの事業の在り方を作っていくことになりました。また、2016年より「気仙沼地域エネルギー開発株式会社」「気仙沼まち大学運営協議会」「一般社団法人気仙沼地域戦略」「気仙沼水産資源活用研究会」「一般社団法人まるオフィス」の5つの団体で活動を始めた計9名の地域おこし協力隊も、各々活躍しております。2018年度はNPO法人ETICが主催する「ローカルベンチャーラボ」に2名の隊員が参加し、協力隊の終了後を見据えたビジネスプランを磨きました。ラボ受講生の昆野哲氏は現在気仙沼市内に唯一残る銭湯「友の湯」を起点としたエリアリノベーション事業として、銭湯シェアハウスを起点とした、移住定住やコミュニティ支援事業を構想しています。気仙沼に新しい産業を生み出すべく、新しいチャレンジが広がっています。

<石巻市>「石巻市地域おこし協力隊×右腕プログラム」、として、今年度は石巻市北上地区で活動するウィーアワン北上に地域内で住民とコミュニケーションをとりながら健康を見守る「コミュニティナース」として平野亜紀さんが着任しました。地域内での活動に加え、石巻市のローカルベンチャー推進事業として行われている石巻版松下村塾にも参加。松下村塾は右腕受け入れ先リーダーで元高校教師の亀山貴一さんが塾長を務め、石巻で挑戦する人を支援しています。3/9(土)の成果発表会では、他の受講生と一緒に、亀山紘石巻市長の前で事業プレゼンを行いました。



「石巻市地域おこし協力隊×右腕プログラム」は、現在も2名の右腕(協力隊員)を募集中です。

●「雄勝」の豊かな地域資源「牡蠣」を世界に発信し、地域に賑わいと雇用を生み出す! / 株式会社海遊

<https://drive.media/career/job/18685>

●ササニシキ農家と一緒に「農を中心とした地域おこし」 / 株式会社田伝むし

<https://drive.media/career/job/16804>

みちのく復興事業シンポジウム ～ 東北から、パラダイムシフト ～

開催概要

- ・開催日時：2019年3月5日(火) 14:30～17:00
- ・開催場所：電通ホール（東京都港区）
- ・参加人数：152名

<イベントの概略>

2013年から年1回開催されているシンポジウムで、今回で7回目となりました。震災後の東北では、これまでと違う価値観で豊かな暮らし方を求め、持続可能な地域社会をつくろうとする取り組みが数多く生まれました。これからの社会における人々の幸福な生き方や産業の在り方とともに、東北で生まれた活動が示す「未来の兆し」について考察することを目的とし開催されました。

<プログラム内容>

第1部基調講演「幸福とイノベーション」

- ・前野隆司氏
(慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授)

第2部ショートプレゼン「第四次産業革命の本質」

- ・須賀千鶴氏
(世界経済フォーラム第四次産業革命日本センター センター長)

第3部ディスカッション「第四次産業革命から見た東北」

- ・NoMAラボ チーフプロデューサー 高橋大就氏
- ・合同会社巻組 代表社員 渡邊享子氏
- ・株式会社ポケットマルシェ 代表取締役 高橋 博之氏



● 開会の挨拶

みちのく復興事業パートナーズ参画企業である株式会社電通 代表取締役 遠谷信幸氏より、「東日本大震災は、人生で大事なものは何なのか、これからどのような社会を築いていくべきなのかを私たちに問うてくれた。このシンポジウムが更なる繋がりを生み、それを促進していくきっかけになることを願っています。」とご挨拶いただきました。



● みちのく復興事業パートナーズの紹介

NPO法人ETIC. 山内幸治より、事業の紹介を行いました。本事業は2012年6月、「東北の自立的な復興に寄与するべく現地のリーダーを支援する」という目的のもと発足しました。

2013年より始まった年一回のシンポジウムも今年で7回目となり、今回のテーマ「東北から、パラダイムシフト」は非常に大きなテーマですが、予定調和ではない未来の話ができる場になればと願い企画した趣旨を述べました。

● 第1部：基調講演

『幸福とイノベーション』と題し、慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授 前野隆司氏より講演いただきました。



前野教授からは幸福学の基礎や重要な概念をご説明いただいた後、どのような状況下でイノベーションは起きやすいのかという点をお話いただきました。合理的・効率的に競争に勝つという時代は終わりを迎え、従来の概念にとらわれずOut of Box Thinkingができるプレイヤーが伸びていく時代であること、また多様性のあるチームの成果はイノベティブであることが多いという研究結果からも、まさに震災後の東北がそのような場であると言えるのではないか？というお話には、多くの方々が続いているように見受けられました。



また、幸せの4つの因子（やってみよう、なんとかかなる、ありのままに、ありがとう）と、「失敗するかもしれないけれどTry & Errorでやってみよう」というところからイノベーションは生まれるという「イノベーションの条件」が合致することからも、その機運が高まっている東北という地域が期待できることをお話いただいたことは非常に印象に残りました。利他の象徴である“太陽”のように、みんなが本当にやりたいことを理解し信頼し合い、楽観的で前向きに自分らしく生きる幸せな社会を目指したいと、結びの言葉をいただきました。

● 第2部：ショートプレゼンテーション

『第四次産業革命の本質』と題し、世界経済フォーラム第四次産業革命日本センター センター長 須賀千鶴氏より講演いただきました。2017年3月に米国サンフランシスコに設立された第四次産業革命センターの一番最初の支部として日本が選ばれました。官民が連携し様々なバックグラウンドの人が関わり、あらゆる変化をデータ・ドリブンに起こしていくことを目的とされています。その際に重要となってくるのが、ある程度人口と経済規模が大きい国でデータを集め実証していくことですが、中でも日本は震災後に世界を驚かせた通り「大変な時ほど

協力し合う特徴」があり、マルチ・ステイクホルダーで同じ課題について話し合う必要がある際に対等なパートナーシップを築けることから、センター設立の目的地とされたそうです。この背景からも、震災後の東北が、まさに社会全体に変化を起こすにふさわしい土地だと言えるそうです。



今後は「人々の生活にとって非常にインパクトや効果はあるのに、専門的すぎてあまり理解されない課題をしっかりと認識して議論していけるよう務めたい」という目標をシェアいただき、多くの方の共感を得られました。

● 第3部：ディスカッション

『第四次産業革命から見た東北』と題し、以下のプレゼンターをお呼びして議論を行いました。

- ・慶應義塾大学大学院 教授 前野隆司氏
- ・世界経済フォーラム第四次産業革命日本センター
センター長 須賀千鶴氏
- ・NoMAラボ チーフプロデューサー 高橋大就氏
- ・合同会社巻組 代表 渡邊享子氏
- ・株式会社ポケットマルシェ 代表取締役 高橋博之氏

まずはNoMAラボの高橋氏、巻組の渡邊氏、ポケットマルシェの高橋氏がそれぞれの事業紹介を簡単に行い、ETIC.宮城から質問を投げかける形で進行了ました。

ETIC.宮城の「福島は東北の中でも課題先進地域だと思うが、どのような分野で課題解決に向けて取り組んでいる/いけると思われるか？」という問いに対して、NoMAラボの高橋氏は「ドローンの実験場、自動運転試験場、IT教育分野、高齢者×テクノロジーなど、チャレンジが起こしやすい環境である福島だからこそその新しい分野で進んでいると感じます」と回答されました。須賀氏も「震災直後の人々が耐え整然と復興に向かった姿は最初に世界にワオ！と言わせ、次にワオ！と言わせるのはテクノロジーが実現する新しい社会なのではないか」とコメントされ、まさにそれぞれ第四次産業革命なのではないかという話題となりました。



次に、巻組の渡邊氏からは「現在は、絶望的な条件の中でどうそれを乗り越えていけるかと思える人が活躍できる時代であり、何をやっているかよくわからないけれど幸せそうな人を増やしていかないと、日本は限界がくるのではないか」という提言があり、それについて前野氏から「AIは高度な大量のデータがあるところから仕事を奪っていくと言われるが、“よくわからないこと”はコンピューターが真似できない（謎は真似できない）。それが第四次産業革命なのではないか」とコメントされました。

そしてETIC.宮城の「これまで事業を通して生まれてきた関係人口の例を教えてください」との問いに対し、ポケットマルシェの高橋氏は「サービスを通して故郷難民（故郷がない人）だった消費者と身寄りのない生産者が繋がり“故郷”ができたという事例や、多様な消費者（例えばビジネスやマーケティングの専門家など）と交流が生まれることによって生産者の意識が変容され売り方も改善してしまう事例を挙げ、「このような、異質な出会いが都会も地方も変えてしまうような取り組みを続けていきたい」と回答。



最後に、どれだけテクノロジーが発達しようとも、大切なのは人の関わり（共感の力）であるという議論から、前野氏から「人は幸せの中にいると気づいていない人ほど幸せだという研究結果もあるので、幸せと第四次産業革命について考えた時、人の繋がりの中で謎なことも謎じゃないことも起きていて、気づかない中に実は存在するくらいの社会になると良いと思う」と締めくくっていただきました。

● 閉会の挨拶

ETIC.宮城より、「本シンポジウムに参加された方々にはこの機会を未来に繋いでいただき、これからも何かご自身の立場で変化を起こし続けていただきたい」というコメントで、閉会の挨拶とさせていただきます。

関係者・協力企業の皆様におかれましては、改めて継続的な関わりに感謝申し上げます。

福島復興産業人材育成塾 (第3期)

福島復興産業人材育成塾も3年目となります。今年も7ヶ月間続く育成塾の最初、will/can/mustの「will」に向き合う、リーダーシップセッションを担当させていただきました。

普段、東京だと、奇想天外なアイデアを持つ起業家の話を聞くことが多いだけに、地域に根差した「建設業」「牧場」「花屋」…など思いっきり地場の人たちが、どんな風に自分と向き合い、その先に新しい価値を作っていくのか。

「地域のために」と、強い思いを背負っている人が多いけれど、やっぱり、他人が描いたものに向き合い続けるのは難しい時もある。でも、自分の思いにはごまかしがきかないからこそ、そこに真正面から向き合うことが最初のステップ。

思いの原点を探るなかで、ホンネを語る照れや認めたくない癖がでてることもあるけど、それを語る勇気に敬意を表しながら…。

第3期はまだ始まったばかりですが、安心して話せる関係づくりに、少しでも近付けたのなら嬉しいです。地域だからそのダイナミックさとスピード感。今後の広がりも、今からとっても楽しみです！



福島復興産業人材育成塾 (第1・2期フォローアップ研修)



ご支援・ご寄付のお願い

2021年3月11日、震災から10年というタイミングに向けて、更に東北内でのチャレンジの活性化と、その自律的持続的な取り組みを支えていくために、私たちは下記の方針で取り組んで参ります。

- (1) 東北オープンアカデミーを中心に、東北内のリーダー同士の学びのコミュニティづくりと、東北と都市部との希望関係人口づくりに取り組みます。
- (2) ローカルベンチャー推進協議会で連携する、岩手県釜石市、宮城県気仙沼市・石巻市、熊本県南小国町を中心に、東北や熊本内に官民連携でのローカルベンチャーを支えるエコシステムのモデルづくりに取り組みます。

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、2019年2月末現在、ご寄付・助成金等の総額は1,004,078,935円（2018年度末のご寄付・助成金をもとした震災復興基金残高は、約3,500万円）という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。震災から10年という節目に向けて、引き続き東北のリーダーコミュニティを育む取り組みを進めて参ります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしく願い申し上げます。

《ご寄付の受付》ETIC.は認定NPO法人です。法人/個人ともに、ご寄付は税制控除の対象になります。
<http://www.etic.or.jp/kifu>

連絡先・お問い合わせ先

- ◆NPO法人ETIC.内 ローカルイノベーション事業部（震災復興リーダー支援プロジェクト）事務局
(担当：山内・押切)

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>